

特集

チェルノブイリの祈り

—いくつもの出会いを残して—



10月15日、松本市あがたの森文化会館講堂



味をもっています。また、エレーナ先生と州立病院のステトラナ副院長は交流が深いようです。新生児の医療支援、基礎研究を行う上でも、人間の輪がつくられ始めた手応えを感じつつあります。

今回の訪問の全体を通じて、(これまで何回か交流をくり返したことで)今回は同業者として肩の凝らない話ができるようになってきたことは自分にとっては嬉しいことでした。物的支援についても、最初の頃はリクエストが強く、支援慣れとか無い物ねだり的なところがあるような気がして、こちらも物的支援以外の支援の方法を躍起になって考えているようなところもありました。しかし、周産期医療にはこれまでほとんど支援の手が入っていなかったこともあり、彼らは設備面以外だけでなく、技術面、情報面でも非常に渴望しているのではないかと考えるようになりました。

これらをふまえて、最後に、これらの新生児医療協力について。やはり現場をみると、まだまだ設備、機材の不足が目立っており、少しずつでも医療品支援が続けられていくことができれば、と思います。また、診断、治療についての医療情報をこちらから選んで提供することで、医療技術面での向上に協力したいと思えます(ペラルーシでは限られた医療者しかインターネットを利用しておらず、医学書籍も少ない)。また、計画段階にある胎盤の被曝量と胎児や胎盤との関連についての研究が始められれば、と思えます。このような医療協力を続けることができるのも、ご支援いただいたみなさまのおかげと、感謝しております。また、新生児医療協力についてのご意見がありましたら、ぜひお聞かせ下さい。今後も、ささやかですが関わり続けたい、と思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。